大久保利通の「富強化」構想序説

——米欧回覧と大久保——

辻　岡　正　己

目　次

はじめに
本論
おわりに

はじめに

明治維新政府は先進的欧米資本主義列強に伍するために富国強兵を最高目標とし，その国是達成の手段として殖産興業政策を，さらにそれを可能たらしめる社会的・文化的基盤として文明開化を標榜したことは周知のとおりである。明治維新政府はみずからもまた当時世界最高水準の文明による富強国家である資本主義社会を形成すべく，西洋化を志向し，西欧化政策を強力に推進した。その政策遂行の中核となり，日本近代国家の樹立にもっとも貢献したのが大久保であった。松平春嶽は大久保を「古今未曽有の大英雄」であるとし，「維新の功業は大久保を以て第一とするなり[(1)]」と激賞した。

渡辺国武は大久保の公生涯は欧米巡回を境に前後2段階に分かれるという[(2)]。大久保がいわゆる「大久保政権」下で，内務省を中軸として富強実現

のために殖産興業政策を展開したのは第二段階においてであった。わずか4年半という短期間にすぎなかったが，この間の大久保の政治や政策は日本資本主義形成の基礎となり，近代日本経済史上における序幕的意義をもったのである。本論稿は大久保の「富強化」構想に重大な影響を与えた「米欧回覧」との関連性を考察したもので，のちの「征韓論に関する意見書」・「立憲政体に関する意見書」ならびに大久保の殖産興業論分析のための序説をなすものである。

本　　論

1871（明治4）年11月12日，右大臣岩倉具視を特命全権大使とし，参議木戸孝允・大蔵卿大久保利通・工部大輔伊藤博文・外務少輔山口尚芳を副使とする一行48名の遣外使節団が，1年10ヵ月におよぶ米欧回覧の旅に出発した。[3] この岩倉使節団は大使・副使以下理事官・書記官・随行のすべてを正式メンバーとする幕末維新期の最大にしてもっとも質の高い，最後の遣外使節団であった。その視察期間が長期にわたったこと，国内政情が不安定な時期に政府の最有力者のほとんどが大挙して国外へ出たことは世界史上まったく例がない。この米欧回覧は日本の近代化に決定的な方向をあたえた。岩倉遣外使節団の米欧視察による列強の制度・文物との接触は，かれらに深刻な衝撃をあたえ，資本主義世界転換への強い関心をもたせた。この資本主義認識がのちの征韓論争にあたって非征韓論となり，西郷らの征韓派と対決することとなったのである。またかれらが天皇制的専制国家の形成と資本主義創出の直接的担い手となったことを考えれば，米欧回覧は日本近代史上特筆されるべき重大な歴史的意義をもつものであった。大久保の富強化構想と殖産興業政策論も，ともにかれが米欧回覧に参加したことによっていっそう明確化されたものであった。

同年7月14日に廃藩置県の詔[4]が発せられて中央集権体制が樹立されたが，これは西郷・木戸の連合政権的性格のものであった。西郷・板垣らはいまだ内政未整備なるにかかわらず，政府首脳部が一時に打ち揃って海外

へ出るのは宜しくないと主張し，岩倉大使一行の米欧回覧に反対した。[5] 三条も9月10日木戸に書を送って，洋行を思い止まり，政府部内にあって政務に専念するよう忠告した。[6] 大蔵大輔井上は木戸の洋行には大いに賛成しつつも，大蔵卿大久保の洋行には強く反対した。[7] 元来，廃藩置県後大久保が大蔵卿に就任してのちも，「近来の様子を熟察いたし候に大蔵省の権盛んに相成り，是非殺さず候而は相済まず申す論説之有り，既に左院においても彼是異論相立て」[8] という政情があった。大蔵大輔井上からすれば強大な権限をもつ大蔵省に他省からの強い反感があり，また当時大蔵省は民政・財政を兼掌し，廃藩置県後いまだ日が浅く省務が多難なおりから，大蔵省の留守をあずかることに大きな不安をいだき，大蔵卿大久保の岩倉使節団への参加に激しく反対し，大蔵大輔の辞任を申し出たのであった。結果的には大久保の慰諭，三条・岩倉・木戸・大久保らの斡旋によって，大久保の留守中，西郷が大蔵省事務総裁となって井上を後見することで問題が解決した。[9] 井上は辞意を撤回して大蔵省にとどまることとなったが，10月18日付大久保宛書簡で，留守中の後事を西郷と十分話し合ってほしいと，次のごとく懇請した。

> 何分微力御代理之処も無二覚束一候得共，上野・渋沢之力を便りに，力を尽し一可申候。難船之乗留，屹度御請合は六ツケ敷事と苦心此事に御座候。……御出立前には，必々西郷先生えも克々此後之事情互に相通じ候様，御談合置可被下候。……。[10]

大隈も留守政府を危惧して，同月9日付木戸宛書簡でその旨，次のごとく表明していた。

> 廃藩立県の実行相挙り候処を目的に内務の処御取りかかりに相成候に付而は実に事多岐に出候而は必混雑相生じ可申歟と奉存候。[11]

井上・大隈らの不安に対する保障として岩倉使節団と留守内閣とのあいだに約定12ヵ条[12]の誓約がなされ，ここに岩倉使節団は留守内閣に万全の措置を講じたうえで米欧回覧の旅へと出発したのである。

政府内部に国家体制の構築をめぐって早晩対決せざるをえなかったほど

の基本的対立をはらみながら，その対立する一方の政治勢力の政局の中枢であった木戸・大久保両派の有力者たちが，西郷・板垣らの反対や大隈の不安にもかかわらず，また廃藩置県によって官職を失い生計の途を奪われ，失望と憤怨の士族たちが中央政府の打倒をねらっているおりから，さらには前年92件この年には64件の民衆による騒擾が起こって，人心いまだまったく定まらない世情紛々たるさなかにおいて，政府を留守にして長期間にわたる米欧回覧へと旅立った理由はなにであったか。とくに大久保が井上の激しい反対を押し切ってまで，岩倉使節団に参加したのはなぜであったろうか。

廃藩置県のわずか4ヵ月後のいまだ危機的状況が克服されていない時期に，政府首脳がこぞって米欧回覧に出発した主たる理由は，次のごとしであった。1．1858（安政5）年，列強の強要で締結せしめられた不平等条約たる修好通商条約の改正期限が，翌72（明治5）年7月と迫っており，その改正打診の予備交渉をすすめる必要があった。2．廃藩置県によって樹立した中央集権的統一国家に対応する「万国対峙」の富国強兵実現のために，「宇大の大勢」の実地にふれることによって，国家体制整備と殖産興業政策推進の具体的方策を学び，困難にして多岐にわたる日本近代化への足がかりを早急にさがし求める必要があった。遠山茂樹氏によれば，廃藩置県後の「中央政府の施政は，もはや倒幕派的立場をはかるに越えるもの」であり，「内政・外交の基本方針の検討」が岩倉使節団の任務であった。[13]

9月15日，三条が勅を奉じて岩倉に下した特命全権大使を米欧各国に派遣すべき「事由書」[14]によれば，「列国ト並肩スルノ基礎」を確立し，「宜ク従前ノ条約ヲ改正シ独立不覇ノ体裁」を整備することを前提とする。条約改正は列国公法によらざるをえないため，必然的に日本の国内法もその必要に応じて変革改正されねばならない。そのため特に全権使節を各国へ派遣し，西欧諸国の開化最盛の国体・諸法律・諸規則などの実態を学び，その方法をさぐって，これを日本国民に施設する方略を目的とすると述べて

いる。

日本の旧体制を万国公法にのっとって変革改正しようとする意図から，岩倉使節団の視察研究対象も制度・法律・理財会計・産業施設・教育・兵制・そのほかあらゆる領域にわたっており[15]，それだけに一行は48名にものぼったのである。実に「米欧回覧」は日本のあるべき姿を欧米諸国の富強の姿に求めて，その具体化を学びとろうとした一大国家事業であった。したがって，岩倉使節団に書記官として随行した林薫によれば，元来「米欧回覧」は在朝の勢力ある政治家に親しく欧米事情を目撃させて，将来の施政に資するのが目的であるから，岩倉一行の帰国後は三条を上坐として，今回国に残った政治家を派出することが詮議されたのである[16]。

法権・税権回復のための条約改正交渉の壁は厚く，最初の訪問国アメリカで早くも挫折した。そのため条約改正交渉は中断され，その後は西欧各国での回覧をとおして，万国対峙の近代国家の基礎がためとする各領域における調査・研究が使節団一行の使命となった。

岩倉大使一行がアメリカ滞在中に伊藤が起草し，岩倉・木戸・大久保らの承認をうけた「使節委任ノ全権」および「天皇陛下ノ期望預図ノ眼目[17]」についての申し合わせによれば，岩倉使節団の使命は直接に条約改正することではなく，条約改正を実現できるだけの，「開明諸国ノ社中ニ入ラシメ」るために，「内政ニ於テ如何ナル改革ヲナスヘキ呼，如何ナル法律ヲ設立スヘキ呼，如何ナル方略ヲ以テ如何ナル政務ヲ施行スヘキ呼，又外務ニ於テハ如何ナル方法ヲ標準トスヘキ呼，如何ナル交際ヲナスヘキ呼[18]」などの事項について「諮議研究」することとしたのである。諮議研究すべき具体的内容は，わが東洋に超絶した欧米各国の「政治制度風俗教育営生守産」などであり，これらの「開明ノ風ヲ我国ニ移シ，我国民ヲシテ速ニ同等ノ化域ニ進歩セシメンコトヲ志[19]」すものであった。ここには「文明開化」による「西洋化」への道こそが，日本をして対外的独立を得さしめる唯一の活路であることが明確化されている。岩倉使節団の米欧回覧の目的は，先進的欧米資本主義列強の姿を範として日本の富強を実現する具体的方策

を学びとることにあったのである。伊藤は12月14日ニューヨークでのレセプションの席上，かれの有名な「日の丸演説」[20]のなかで，次のごとく述べた。

> 今日我国の政府及び人民の最も熱烈なる希望は，先進諸国の享有する文明の最高点に到達せんとするに在り。……使節としても個人としても，我等の最大の希望は，我国に有益にして，その物的及び智的状態の永久的進歩に貢献すべき資料を齎らして帰国するに在り。……故に日本は急進を望むや切なり。

「富国強兵」・「殖産興業」は明治維新政府成立以来の国是であった。列強に伍するためには伝統的な領主的商品経済を基調とした農業中心の生産構造を止揚し，工業中心の生産構造へ転換すべきことが認識され，1870年閏10月工業化推進の政府機関として「百工勧奨」をつかさどる工部省が創設された。すでに幕末以来欧米資本主義列強の重圧下で富国強兵が強く意識され，幕府・諸藩によって殖産興業政策が推進されていた。明治維新政府はこれらを官収し，工部省の所管とした。しかるに，いまだ近代産業発達の歴史的・社会的背景をもたない当時の日本としては，維新政府自身近代産業について未知であり，幕府・諸藩・維新政府の海外派遣者・留学生による西欧についての断片的知識の紹介に依拠して，断片的・場当たり主義的に西欧文物の導入・移植がおこなわれたにすぎなかったのである。いまや，富国強兵・殖産興業の具体的形態が「文明開化」にあることが強く認識され，本格的・体系的・積極的に日本近代化を推進する導きの糸として，そのあるべき未来像を欧米に求めて岩倉使節団の「米欧回覧」となったのである。太政大臣三条は，日本の前途への遠大な展望の使命を担った岩倉使節団の出発にさいし，次のごとく祝福した。

> 各欽旨ヲ奉シ同心協力以テ其職ヲ尽ス我其必ス奏功ノ遠カラサルヲ知ル行ケヤ海ニ火輪ヲ転シ陸ニ汽車ヲ輾ラシ万里馳駆英名ヲ四方ニ宜揚シ〻無恙帰朝ヲ祈ル。[21]

以下，大久保が大蔵省を留守にすることを井上に激しく反対され，井上の意見に理がありとしてほとんど大久保の洋行が中止されざるを得ない情勢であったにもかかわらず，あえて岩倉使節団に加わった理由について考

察してみたい。

1．元来，大久保は討幕・明治維新政府成立に重大な貢献を果たしたとはいえ，財政・経済問題に関しては十分な見識も経験もなく，大隈を中心とする経済的革新派官僚にはとうてい太刀打ちできなかった。その大久保がなにゆえ大蔵卿という要職にあたったかは当時の政情と関連するが，これについては当面言及しない。大久保は廃藩置県断行直前の6月，参議を辞任して大蔵卿に就任していた。これは財政・経済の実権が大久保に集中したことを意味する。かれが財政・経済の責任者として財政経済政策の主導権をにぎり，殖産興業政策推進の中心に坐るためには，なによりも広く海外の情勢に通じ，西欧文明を実見する必要があった。

2．廃藩置県後の政府は西郷・板垣・木戸・大隈4参議による連立政権であったが，実務では開明派官僚が強大な権限を有しており，かれらのほとんどはいわゆる「洋行帰り」であった。廃藩置県前後において政府部内の主導権をにぎるにいたらなかった大久保としては，開明的大蔵官僚の上司として，かれらを統御するうえからも，いっそうみずからの眼で広く西欧諸国の制度・文物を視察研究する必要性を痛感し，岩倉使節団に加わることを熱望したとおもわれる。

3．9月12日付大久保から岩倉宛の書簡[22]によると，この日大久保は井上と「熟談」した。その内容は大蔵省の権限が強大なため，その権限をめぐる派閥対立から，日ならずしてかならず「不測の弊を生し又々御変革」ということになりかねないという話し合いであった。そのため大久保は「是非他日を目的にして今日其治療を施し置不申候ては誠に御大事ニ候」ゆえ，大久保と木戸が洋行するのが「良法」であるとして，岩倉使節団に加えられたき旨を具申したのである。また大久保は9月17日付岩倉宛書簡[23]で，「此姿にて打過候てハ日ならずして災を招キ不可救之形勢ニ陥」るのは明白であるから，遣外使節の件を緊急に廟議で決定されたいと懇請した。しかして木戸・大久保不在の留守政府を西郷に託し，板垣を説得して，「安心して千里外に出」ようとした。そのことによって「只々禍ヲ末萠ニ防き一挙

両得軽重を取捨して権宜之策を取」るとしたのである。大久保の真意は木戸と一緒に岩倉使節団に加わることによって，一方で政府部内の派閥争いを鎮靜化させ，他方大隈が「大隈使節団」派遣を計画した外政への主導権を握ることができるとみていたと考えられるのである。

4．9月12日付岩倉から木戸宛の書簡[24]によれば，「何卒足下大久保御同行不相成哉，縦今一事ニ御任シナクトモ遊軍ニ而御補助相成候得ハ，事実上ニ於而，元ヨリ高論ヲ請候事」。次に各国に対してわが一行の重きをなすゆえんとなり，帰朝後は視察結果を政策に実行するにあたって，国民はいっそう信をおくこととなると，大久保とならんで木戸の岩倉使節団への参加を強く要請したのである。元来，遣外使節団は大隈の発議によって「大隈使節団」として派遣されるはずのところ，岩倉と大久保の謀議[25]によって「岩倉使節団」へと逆転劇が演じられた経緯があり，また岩倉と大久保とは1862（文久2）年島津久光が勅使大原重徳を奉じて東下し，幕府に迫って，將軍慶喜の後見職として越前松平慶永の政事総裁職を承認させたとき，大久保が大活躍をなし，以来，岩倉・大久保の緊密な関係が継続されており，岩倉使節団派遣に対しても，両者は最初から不可分の関係にあったのである。

岩倉使節団が歴訪した諸国は12ヵ国にのぼっているが，寄港地をふくめれば合計18ヵ国にも達した。それらのなかでもっとも関心が集中し，帰国後の政策に重大な影響をあたえたのはイギリスとドイツであった。岩倉使節団は帰英中の駐日公使パークスらの案内で，1872年7月から約4ヵ月間にわたってイギリス資本主義の心臓部をつぶさに巡察した。1881（明治14）年，国内工業生産力においてアメリカに追い抜かれるまでのイギリスは名実ともに世界経済の統括者として君臨した。当時のイギリスはまさに「世界の工場」として隆盛を誇っており，使節団一行は日本が富強達成の範とした資本主義の成熟した姿を，目のあたりに見学することができたのである。大久保は当初からイギリスに強い関心をいだいており，同年7月19日付西郷・吉井宛書簡には，「当国は名誉の場所柄故別段の見物所多く是非

三四旬に相滞候初より之賦りに候間十分目撃致度候[26]」と記したのである。岩倉使節団一行のイギリス資本主義見学の印象は「米欧回覧実記」が全五編中第二編をすべてイギリスのみの記録に当てていることからも，それがいかに強烈であり，かれらがいかにイギリスを重視したかが推測されるのである。「米欧回覧実記」はイギリス資本主義観察の実状を，次のごとく記している。

> 英国ノ富ハ，元来嘖利ニ基セリ，国中ニ鉄ト石炭ト産出高ノ莫大ナル事，世界第一ナリ，国民此両利ニヨリ，汽器，汽船，鉄道ヲ発明シ，火熱ニヨリ蒸気ヲ駆リ，以テ営業力ヲ倍蓰シ，紡織ト航海トノ利権ヲ専有シテ，世界ニ雄視横行スル国トハナリタリ，故ニ全国内ノ銕冶ノ業ノ盛ナル事，我一行ノ目ヲ驚カセシ所タリ[27]。

また「英国ノ製作ニ於テ，其基本トナリタルハ，炭銕ニアリ，……其製作ノ利ハ，紡織ニアリ[28]」というごとく，岩倉使節団はイギリスの生産基盤が石炭と鉄にあり，その利益が紡織にあると認識した。かれらの目に映じたイギリス像は，この国がなによりも貿易国・工業国であるということであった。「米欧回覧実記」は，次のごとくも述べている。

> 英国ハ商業国ナリ，国民ノ精神ハ，挙テ之ヲ世界ノ貿易ニ鍾ム，故ニ船舶ヲ五大洋ニ航通シ，各地ノ天産物ヲ買入レテ，自国ニ輸送シ，鉄炭力ヲ借リ，之ヲ工産物トナシテ，再ヒ各国ニ輸出シ売与フ，是其三千万ノ精霊カ，生活ヲナスノ道ナリ[29]。

要するに，鉄と石炭の生産による機械製工場工業と，その工業を背景とする貿易の両者が，鉄道・海運を媒介として結合することによってイギリスの富強が形成されたのである。巡察の随所で岩倉使節団一行の目前に展開する大工場群を目撃して，イギリスの隆盛に感嘆した大久保は，「英国ノ富強ヲナス所以ヲ知ルニ足ルナリ」という書簡のしめくくりをもって，西郷らの友人にその実態を報告したのである[30]。

「米欧回覧実記」は，日本とイギリスはいずれも島国で地形・位置・広狭・人口などがきわめてよく似ており，「此国ノ人ハ毎ニ日本ヲ東洋ノ英国ト謂フ，然レトモ営業力ヲ以テ論スレハ，其懸殊モ亦甚シ[31]」と述べてい

る。元来，この「米欧回覧実記」第二編（イギリスの部）記述の基本的視角は，「此編ノ主トスル所ハ，其回覧ニ就キ，英国ノ富強ヲ致スニ於テ，四民生理ノ景況ヲ実歴シ，我日本人ニ感触ヲ与フルニアリ」[32]というにあった。このことは日本とイギリスが多くの点でよく似ており，イギリス人が「日本ヲ東洋ノ英国」と呼ぶにもかかわらず，国民総生産の指標としての「営業力」が一方では絶大な工業力を背景とする大貿易国家であり，「我日本ハ海上ノ弧島」[33]というほど，なにゆえかくも大きな隔差をもつにいたったかという，岩倉使節団自身への問いかけであったとおもわれる。イギリスと日本のあまりにも大きすぎる落差の決定的要因は工業と運輸・貿易のそれにあり，単なる量的な先進・後進ではなく，産業革命を経た国と経ない国との経済段階の質的格差から生ずる生産諸力の隔差にあったのである。大久保は鉄と石炭の文明によるイギリス資本主義の実体に接して大きな衝撃をうけ，一時官僚的政治家として自信を喪失した。大久保は在英中，バーミンガムにむかう車中で同行の「米欧回覧実記」の編者久米邦武に，次のごとく語ったという。

> 私のような年取ったものは此から先の事はとても駄目ぢゃ，もう時勢に応じられんから引く許りぢゃ。……自分は幕府を倒して天皇の政治になさうと考えた，そしてその事業もほぼ成って我々のやることだけはやった。然し後はどうも困る。斯うして西洋を歩いて見ると，我々は斯んな進歩の世には適しない[34]。

近代資本主義の鉄と石炭の文明がもたらす工業の繁栄，商品流通の手段としての鉄道・海運，自由主義にもとずく貿易などの実態に触れて驚嘆し，大きな衝撃をうけたのは全権大使岩倉も同様であった。岩倉は8月5日付三条宛書簡[35]で，「筆舌に述べ難く何も目を驚かす許りに御座候」と報告したのである。

近代資本主義イギリスと後進国日本との隔差が岩倉使節団一行にあたえた衝撃は深刻であった。しかし，かれらはイギリスをはじめとする欧米資本主義諸国の富強が，19世紀に入って僅々40年の間に，政府の勧業貿易政

策の宜しきをえて達成されたものであることを知った。「米欧回覧実記」は，次のごとく述べている。

> 当今欧羅巴各国，ミナ文明ヲ輝カシ，富強ヲ極メ，貿易盛ニ，工芸秀テ，人民快美ノ生理ニ，悦楽ヲ極ム，其情況ヲ目撃スレハ，是欧州商利ヲ重ンスル風俗ノ，此ヲ漸致セル所ニテ，原来此州ノ固有ノ如クニ思ハルレトモ，其実ハ然ラス，欧州今日ノ富庶ヲミルハ，一千八百年以後ノコトニテ，著シク此景象ヲ生セシハ，僅ニ四十年ニスキサルナリ。(36)

諸産業が短期間に盛大となった旨を説明したのち，次のごとくも述べている。

> 欧州農工商ノ三業ミナ，今日ノ繁昌ヲ致セルハ，此如ク僅々ノ年数ニスキサルヲ知レリ，今ノ欧州ト四十年前ノ欧州トハ，其観ノ大ニ異ナルコトモ，亦想像スヘシ。(37)

イギリスをはじめとする先進欧米諸国の産業隆盛と富強が，19世紀に入って半世紀たらずのあいだに達成されたことを知らされたとき，大久保は驚嘆・絶望から一転して先進的制度・文物の摂取に意欲的となり，積極的に熱心な研究を開始した。大久保の意欲的な勉強ぶりについて青木周蔵は，次のごとく述べている。

> 余は，当時独逸に留学していたが，その際大久保さんの勤勉振りには，実に感じ入ったのである。先進国の文物制度を熱心に研究されたもので，到る処で本邦の留学生などを呼び寄せ，特に取調を命せられたこともあり，又意見を徴せられたこともあった。(38)

大久保の研究視察の成果は1874年の「殖産興業に関する建議書」となって結実し，内務省を中心とする本格的・体系的殖産興業政策推進の指標となったのである。

岩倉使節団はイギリスからフランス・ベルギー・オランダ各国を回覧して，プロシアを訪問した。当時のプロシアは普奥戦争・普仏戦争に勝利してドイツを統一し，1871（明治４）年１月プロシア国王ウィリアム１世がドイツ帝国成立を宣言して，まだ日の浅い新興国であった。木戸・大久保らは，すでにプロシア視察以前からこの新興ドイツ帝国に強い関心をいだいていた。木戸はイギリスから1972年９月14日付井上宛書簡において，現

にプロシアのごときは新政比隣に類なし。1800年の初期を推考すれば，国も貧弱にして人民もまた未熟なり。しかしてそれを駕御する。……終に今日の文明を招き，富強を致す所以なり[39]，と記している。大久保もフランスからロシア留学中の西徳二郎宛1873年1月27日付書簡で，「孛(プロシア)，魯(ロシア)ノ国ニハ必ス標準タルヘキコト多カラント愚考イタシ候ニ付，別而此両国ノコトヲ注目イタシ候賦(つもり)」[40]と述べている。大久保は渡欧まえ，すでに欧州留学経験者の西郷従道から当時の欧州情勢の報告をきいて，プロシアと鉄血宰相ビスマルクに関心をいだいていたといわれるが，プロシアの実状を巡察し，ビスマルクからプロシアが後進の小国から大ドイツ帝国にまで発展した苦心談をきいて，いっそう深い感銘をうけたのである。

岩倉使節団，とくに木戸・大久保らは米欧回覧過程で日本の急速な富強化達成のための模範例として，先進的なイギリス・アメリカ・フランスでなく後進的なプロシア・ロシアに強い関心を示した。しかし，大久保はプロシア視察後，留守政府からの召還命令によって3月28日帰国の途につき，木戸はロシアを視察したものの，「米欧回覧実記」によれば「最も不開ナル[41]」国で，とうてい範となしえなかった。日本の現状とイギリスの高度な文明とその先進性は，あまりにも隔絶しており，木戸・大久保らはその文明の高さに圧倒された。木戸は1872年7月1日付杉山孝敏宛書簡で，日本と米欧を比較して，「先以此本に雲泥之相違有之申候[42]」と書き，大久保はさきの西宛書簡で，「英米仏等ハ……開化登ルコト数層ニシテ及ハサルコト万々ナリ[43]」と書いていた。木戸・大久保らは日本と米欧との文明開化の落差の隔絶さを知るにつれ，いっそうプロシアへ傾斜していった。かれらはプロシアを巡察する過程で，ますます日本の富強化達成にとってプロシアが身近かな例であるという確信を深めたのである。木戸はベルリン到着の当日，1873年3月9日付槙村正真宛書簡で，「終に今日之文明に趣き，富強に至りしは独逸之開化なり[44]」と書いて送った。「米欧回覧実記」も，次のごとく記している。

其国是ヲ立ルハ，反テ我日本ニ酷(はなは)タ類スル所アリ，此国ノ政治，風俗ヲ，講

究スルハ，英仏ノ事情ヨリ，益ヲウルコト多カルヘシ。[45]

以下，岩倉使節団，とくに大久保がプロシアを日本のあるべき姿と重ね合わせて，その近似性に注視し，きわめて強い相対的な親近感と関心をいだくに至った理由を「米欧回覧実記」によって考察してみたい。

1．「何方ニ参リ候テモ地上ニ産スル一物モナシ只石炭ト鉄ト而已」[46]のイギリスは，工業・運輸・貿易において富国強兵の手段としての殖産興業政策推進の目標たりうるとはいうものの，文明開化においてあまりにも隔絶しており，日本がとるべき国家体制としては新興ドイツ帝国の方が，より日本と類似性が強かったことがあげられる。イ．日本とドイツはともに統一国家樹立の時期がほぼ接しており，内外ともに多難な諸問題をかかえていた。「米欧回覧実記」は，「日耳曼（ゼルマン）ノ連邦ニ於ル，以太利（イタリヤ）ノ法皇ニ於ル，皆時運ニ催サレ，改革百端，危クシテ後ニ維持セリ，我邦今日ノ改革モ亦然リ」[49]と述べている。イタリアの国家統一は1870年10月，ドイツは翌71年1月，日本の廃藩置県にともなう中央集権的統一国家成立は同年7月であった。ロ．「普国人民ノ営業ハ，重ニ農牧ニアリ」，全人口の約半数の1,200万人は「農ヲ業トスル家」であった。かれらによる農産物を輸出し，その利益をもって鉱工業を興し，外国貿易をおこなうのであるから，同じ貿易国といってもイギリス・フランスの国富の目的とはことなる。その国是からすれば日本と酷似しており，日本としてはプロシアにならう方がより利益が大である。[48] ハ．「此地ノ風俗モ，英米トハ甚タ異ナル所モ多キ中ニ，婦人ヲ尊フ儀甚タ簡ナリ，伯林ニテハ，婦人ト雖モ，亦米英ノ人カ，婦人ニ卑屈スルヲ笑ヒテ，奇俗トスルニ至ル」[49]。かって岩倉使節団一行はアメリカ・イギリスにおいて女性優位の風俗を目撃して驚嘆したのである。プロシアにおいてはかかる男女の在り方を女性でさえ「奇俗」として笑うというのである。また「日耳曼人ハ，帝王ヲ尊敬シ，政府ヲ推奉スルコト，甚タ篤」[50]く，「君民交和シテ相親ムノ状，殊ニ感悦スヘシ」[51]。岩倉使節団はかかる実況を目のあたりにして，いっそうプロシアへ親近感をいだいたとおもわれるのである。ニ．オーストリアは「人民ノ気力，発明ニ乏シケレト

モ，新奇ニ移リ易ク，他ノ新術ヲ見レハ，忽チ旧法ヲステテ，之ヲ習ハス良能アリ，比年頻ニ製作ノ術ヲキワメ，貿易ニ心ヲ砕キ，其盛ナルコト，普国ノ上ニ出ルト謂フモ可ナリ」[52]。日本も「古ヘヨリ発明ニ乏シ」く，建築・鉄冶・磁陶・縫織などすべて朝鮮・中国から学びながら，「今ハミナ之ニ超越」し，「東洋ニ古国多シト雖トモ，其開化ノ度，独リ進ミタルハ我邦ナリ」[53]。古来日本文化は創造よりも模倣文化であり，その特性が日本の富強化達成に当たってオーストリアの工業の上に二重写しにされたとおもえる。

2．岩倉使節団は米欧回覧過程において，日本の表面的で急速な西欧化政策の推進に深刻な反省を迫られるとともに，欧米資本主義列強への対応は殖産興業政策推進と軍事力強化による富強化への道以外に活路がないことを確信した。大久保らにプロシア傾斜への決定的影響を与えたのは，同国の強大な軍事工場と名相ビスマルク・名將モルトケとの会見であった。

イ．岩倉使節団一行はプロシア入りした第一日の1873年3月8日，エッセンのクルップ(Krupp)工場を見学した。この工場はアルフレッド・クルップによって設立された「世界無双ノ大作場」で「英国ニ製鉄ノ業盛ナリト雖モ，之ニ及フ大場ナシ」[54]といわれた。プロシアは名相ビスマルクと名將モルトケを登用して，君臣協和し，軍隊を精練した。しかして，「之ニ猛鋭無比ノ器械ヲ，鍛練精製シテ与ヘタルハ，此製作人『クロップ』氏」[55]であった。クルップが「『エッセン』府ニ製スル大小砲ハ，其鋭利ナルコト，他国ミナ逡巡ス」[56]と指摘された。イギリスを例外として，他の国は「ミナ此人ノ模範中ニ入リテ，国威ヲ補フヲ免カレス」[57]という実態であった。クルップ工場は当時のドイツ帝国の最高の軍事技術水準を集約したものであり，この最新式の銃砲こそが，この国の常備軍強化の根幹であった。当時イギリス・アメリカとならんで世界の3大強国といわれたフランスを普仏戦争で破ったものも，世界最高の性能をもつクルップ製の銃砲であった。日本の富強化を熱望する大久保ら使節団一行が，多大の感銘をうけたのは当然であったろう。ロ．ビスマルク (Otto, Fürst von Bismarck) は3月15

日岩倉使節団一行を招宴し，その席上で弱肉強食の国際政治の現状の世界にいかに対処しているかを語った。[58] かれによれば，「方今世界ノ各国，ミナ親睦礼儀ヲ以テ相交ルトハイヘトモ，是全ク表面ノ名義ニテ，其陰私ニ於テハ，強弱相凌キ，大小相悔ルノ情形」である。「所謂公法ハ，列国ノ権利ヲ保全スル典常トハイヘトモ，大国ノ利ヲ争フヤ，己(おのれ)ニ利アレハ公法ヲ執ヘテ動カサス，若シ不利ナレバ，翻スニ兵威ヲ以テス，固(もと)ヨリ常守アルナシ」。そのため，プロシアは対等の権をもって外交すべき国たらんとして軍事力の強化をはかり，近年に至って僅かにその目標に到達した。各国はプロシアを非難するが，わが国は主権を重んずることによって各国互いに自主し，対等の交りをなさんとするもので，自主権を全うするための悲願であるにすぎないのである。ビスマルクは最後に，次のごとく述べた。

> 欧州親睦ノ交ハ，未タ信ヲオクニ足ラス，諸公モ必ス内顧自懼ノ念ヲ放ツコトハナカルナラン，是予カ小国ニ生シ，其情態ヲ親知セルニヨリ，尤モ深ク諒知スル所ナリ，予カ世儀ヲ顧ミスシテ，国権ヲ完ニセル本心モ，亦此ニ外ナラス，故ニ当時日本ニ於テ，親睦相交ルノ国多シトイヘトモ，国権自主ヲ重ンスル日耳曼ノ如キハ，其親睦ノ最モ親睦ナル国ナルヘシ。[59]

ビスマルクと並んでドイツ統一に大きな役割を果たしたモルトケ(Helmuth, Graf von Moltke)も，ビスマルク同様，軍事力による力の論理を強調した。「米欧回覧実記」は1874年2月のかれの軍事力増強に関する議会演説を引用している。その要旨は，「政府タルモノハ，惟(ただ)倹約ノミヲ主旨トシ，国債ヲ減シ，租税ヲ薄クスルコトノミヲ慮(おもんぱか)ルヘカラス，其歳入ノ額ハ，悉ク国ノ急務ニ充テ，国ノ権勢ヲ境外ニ振ルハスコトヲ務メサルヘカラス[60]」と軍拡財政を前提として，「法律，正義，自由ノ理ハ，国内ヲ保護スルニ足レトモ，境外ヲ保護スルハ，兵力ニアラサレハ不可ナリ，万国公法モ，只国力ノ強弱ニ関ス，局外中立シテ，公法ノミ是循守(これじゅんしゅ)スルハ，小国ノ事ナリ，大国ニ至テハ，国力ヲ以テ，其権理ヲ達セサルヘカラス[61]」。最後に，次のごとく述べている。

> 今此ニ希望スルハ，特ニ太平ヲ保ツノミニアラス，此太平ヲ管領シ，万国ヲシテ，独逸ハ欧州ノ中心ニ位シ，全欧州ノ太平ヲ保護スルモノナリト謂ハシ

メント欲ス，是軍備ヲ振整スルニアルノミ」[62]

ビスマルクとモルトケの「万国公法」よりも軍事力による「力の論理」という発言は，日本が欧米列強と同等の化域に到達するために，「万国公法」に抵触する国内法を改正するための研究も使命のひとつとなっていた岩倉使節団に大きな衝撃を与えた。木戸は3月20日付三浦梧楼宛書簡[63]で，その鮮烈な印象と軍事力強化の必要性を書き送った。大久保も3月21日付西郷・吉井宛書簡に，「殊ニ有名之『ヒスマロク』『モロトケ』等之大先生輩出自ラ思ヲ属候心持ニ御座候[64]」と述べ，西徳二郎へも3月27日付書簡で，ドイツ滞在期間は十分ではなかったが，「ヒスマロク・モロトケ等之大先生ニ面会シタル丈ケカ益トモ可申[65]」と記したのである。三宅雪嶺によれば，「容貌魁偉」な「英傑」ビスマルクに岩倉使節団一行が感服するなかで，「大久保が特に暗示を得たり」とし，「新たに国家を経営するは彼の如くならざるべからずと頷[66]」いたという。このときすでに大久保の心中には「局外中立」の小国主義をすてて大国主義の進路を選択し，日本をしてプロシアに似せてやがてアジアのプロシアたらしめ，みずからはビスマルクたろうとする決意が固められていたであろうとおもわれる。このあと3月28日大久保は本国召還の命をうけて，帰国の途についたのである。

「米欧回覧実記」が，その全編を通じて制度・機構・文化・産業・技術などきわめて詳細に記述しているごとく，岩倉使節団はイギリス資本主義やドイツの軍事制度のほか，各国の政治形態・行政制度・教育制度にも強い関心を示した。青木周蔵によれば，大久保はドイツ留学中の鹿児島出身河島醇から有名な「スタイン」が19世紀初期まず自治制度を確立して，その後立憲政体へ移行した沿革と，イギリス立憲政治の妙用が自治制度の完備の上になされていることを聞かされて，「大久保さんは，内政の事に最も注意を払われ，自治制度に就いて，屢々諸国の状況を取調ぶべき命令を発せられた[67]」という。木戸はとくに各国の教育制度に関心を示した。岩倉使節団の渡米中，外国体験をもつ書記官たちが国際的経験のない理事官たちを愚弄する態度を見て，日本の文明と開化の皮相を痛感し，日本の「開

化」は国民教化を基礎に推進されねばならないと確信したからである。[68] 大久保・木戸ともに富国強兵を中核とする新たな国家機構確立という構想では一致していたものの，そのための諸制度導入の比重のおき方で多少の「ずれ」があったが，これについては当面言及しない。

大久保は米欧回覧過程で，木戸から次のごとき批判をうけるほどの急進論者に転向した。

> 政府之組立を初とし百事務其限り分明に不相成而はと存久翁（大久保…筆者注）へも昨春相論し見候へども，今日の時勢に而は取込丈け取込，其弊害は十年か十五年歟之後には，必其人出候而改正可致との事に而……か様申候而安堵難出来と不伏（マス）に候へども大に力も落申候。[69]

元来，大久保は徹底した漸進主義者であった。「今日の党派は一方は木戸大隈後藤伊藤井上等と見え，一方は大久保副島岩倉と見えたり」[70]といわれ，「伊藤・井上又は大隈等は頻りに西洋主義にて，何事も西洋主義を主張し，木戸を押し立て」[71]たのに対して，大久保はむしろ保守派に属した。もちろん大久保は，すでに幕末薩摩藩が欧米からの新産業・新技術の導入・展開をおこなっており，みずからも欧米資本主義列強の富強を熟知しているだけに，抽象的には早くから富強化志向をもっていたとおもわれる。大隈によると「大久保も想いし程に極端なる保守主義者にあらず，寧ろ進歩主義と称するも差支なき程に『改革』『革新』の意想なきにあらざりし」[72]。大久保が現実的・妥協的で一見保守的にみえたのは薩摩藩，とくに島津家と親友西郷に対する遠慮からであった。またいわゆる民・蔵分離問題にしても，大隈の徒党的「西洋主義者」の梁山泊集団を嫌って機構として確立することを意図したもので，それゆえ1年も経過しない間にふたたび民・蔵合省をおこない，みずからの手で大蔵省を政府最大の官省にしたてあげたのである。大久保が米欧回覧によって富強化思想を抱くに至ったとするのは過大評価であるとしても，かれが富強化構想をいっそう具体的に明確化し，その手段としての殖産興業政策推進に全力を投入するのは，米欧回覧以後のことであったのは疑いない。

1年半余の米欧回覧は大久保にきわめて大きな影響を与えた。帰国後の大久保について，安場保和は「余が驚いたのは，欧米巡回の旅行によって公の人品が変化していたことで」，「従前は，只豪邁沈毅の気象のみに富んだ人であったが，巡回後はそれに洒落の風も交へ，加ふるに其識見が大いに増進せるを感じた」と語り，とくに初めは政治の大体のみに心を傾けて些細なことには留意しない人であったが，「帰国後は，我帝国をして宇内万邦に対峙せしめんには，必ず富国の基礎を強固ならしめなければならないと語られ，施政方針は，専ら教育，殖産，工業，貿易，航海等」を盛んに奨励されたと述べている。[73] また渡辺国武も，同じく大久保にとって米欧回覧のもつ画期的意義について，次のごとく述べている。

> 大久保さんの公生涯は，二段階にわかれて居ると私は考へる。幕府の末葉から全権副使として岩倉公と一緒に欧米各国を巡回さるるまでが第一段階で，この間に大久保さんの理想は，全国の政権，兵権，利権を統一して，純然たる一君政治の古に復するのが其重要目的であったと考へられる。欧米各国を巡回されて其富強の由って基くところを観察して帰朝されてから以後は，第二段階である。この世界上に独立して国を建てるには，富国強兵の必要は申すまでもないが，この富国強兵を実行するには，是非とも殖産興業上から手を下して，着実に其進歩発達を図らなければならない。……之が大久保さんの理想の第二段階であると私は考へる。私が考へるばかりでない，大久保さん自らも，この理想の変転について，しばしば口にせられたのである。[74]

大久保が米欧回覧によってかれの政治生命を決するほどの大影響をうけ，富強化構想をいっそう具体的に明確化し，政権を志向する政治家から殖産興業を意図する政策家に変貌したとはいえ，翌1874年の「殖産興業に関する建議」もいまだ基本方針のみにとどまり，政府のとるべき具体的施策内容が明らかにされるには至っていないのである。

お わ り に

大久保は明治維新政府創出に当たって，岩倉と接合して京都政局をたえず動かせていくという舞台廻しの役割を果たしてきた。廃藩置県後の近代国家構築の課題に直面したとき，財政・経済問題に十分な見識も経験もな

い大蔵卿大久保が大蔵大輔井上の強い反対を押し切って米欧回覧に出発したのは，いわば大久保にとっての必然であり，また幕末以来岩倉と密接不可分の深い関係にある大久保としては，「岩倉使節団」の一員として参加することは既定の方針であった。

大久保は回覧中，富強化達成の手段として，イギリスでは富国のための殖産興業に，ドイツ軍国主義には強兵を，そのモデルとして深い感銘をうけた。しかし注意すべきは，大久保が当初からイギリス・ドイツに強い関心を抱いていたことは周知のとおりであるが，たとえばプロシアにしても，最初から日本の將来の在るべき姿と決定して，その範を求めて訪問したのではなく，国家機構・軍事工場・ビスマルクとモルトケの大国主義論，さらには風俗・国民性の近似性など，同国の巡察過程からプロシアによりいっそう傾斜していったということである。

大久保は米欧回覧によって，かれの富強化構想を具体化・明確化した。その成果が「征韓論に関する意見書」・「立憲政体に関する意見書」および「殖産興業に関する建議」となって結実するが，これらの分析・研究は今後の課題である。　1987・9・18

〔注〕

(1) 松平春嶽「逸事史補」(「松平春嶽全集」第一巻所収) 392頁。

(2) 勝田孫弥「甲東逸話」239—240頁参照。

(3) 岩倉全権大使一行の米欧回覧については久米邦武編「特命全権大使米欧回覧実記」全五編傅聞社，同宗高書房全五編，同岩波文庫版全五編，「大久保利通伝」下巻第一章，「松菊木戸公伝」下巻第七章，「伊藤博文伝」上巻第十編，「世外井上公伝」第一巻455頁以下，大久保利謙編「岩倉使節の研究」宗高書房，田中彰「岩倉使節団」講談社各参照。

(4) 「松菊木戸公伝」下巻1483頁，「世外井上公伝」第一巻451—452頁各参照。

(5) 同上各1495頁，456頁。

(6) 同上各1495頁，456頁，「伊藤博文伝」上巻606頁。

(7) 大蔵大輔井上の大久保洋行反対については「世外井上公伝」第一巻456—457頁，「大久保利通伝」下巻17頁，「大久保利通日記」下巻188—189頁，「松菊木戸公伝」下巻1499—1500頁各参照。

(8) 「大久保利通文書」第四380頁。

(9) 「世外井上公伝」第一巻457—456頁,「大久保利通伝」下巻17—19頁,「大隈侯八十五年史」第一巻427—430頁各参照。

(10) 「世外井上公伝」第一巻464頁,「大久保利通伝」下巻18—19頁「大久保利通文書」第四408頁。

(11) 「大隈重信関係文書」—406頁。

(12) 「岩倉公実記」中948—952頁,「大久保利通伝」下巻22—25頁,「世外井上公伝」第一巻470—473頁,「大隈重信関係文書」—408—413頁,「大隈侯八十五年史」第一巻433—435頁,「伊藤博文伝」上巻616—618頁各参照。

(13) 遠山茂樹「有司専制の成立」(堀江英一・遠山茂樹編「自由民権期の研究」第一巻所収) 39頁。

(14) 「岩倉公実記」中926頁以下,「大久保利通伝」下巻5頁以下,「伊藤博文伝」上巻999頁以下各参照。

(15) 注(14)の各「事由書」参照。

(16) 「林薫伯自叙伝・回顧録」(東洋文庫) 42—43頁参照。

(17) 「使節委任ノ全権」は「伊藤博文伝」上巻636—638頁,「天皇陛下ノ期望預図ノ眼目」は同638—641頁各参照。

(18) 同上637頁。

(19) 同上638頁。

(20) 「伊藤博文伝」上巻625—628頁参照。

(21) 「岩倉公実記」中947頁。「松菊木戸公伝」下巻1502頁。「大久保利通伝」下巻20—21頁。

(22) 「大久保利通文書」第四380—381頁。

(23) 同上385—387頁。

(24) 「松菊木戸公伝」下巻1496—1497頁。

(25) 大久保利謙編「岩倉使節の研究」宗高書房昭和51年57—66頁参照。

(26) 「大久保利通文書」第四433頁。

(27) 前掲「米欧回覧実記」(二) (岩波文庫) 29頁。

(28) 同上31頁。

(29) 同上381頁。

(30) 1872年10月15日付西郷・吉井宛書簡は「大久保利通文書」第四447—451頁,「大久保利通伝」下巻48—51頁, 同10月15日付石原近義宛書簡は「大久保利通文書」第四455—457頁, 同年11月20日付大山巌宛書簡は同上467—470頁各参照。

(31) 前掲「米欧回覧実記」(二) (岩波文庫) 22頁。

(32) 同上382頁。

(33) 同上 (一) 55頁。

(34) 松原致遠「大久保利通」123—126頁。
(35) 「岩倉具視関係文書」第二巻215—217頁参照。
(36) 前掲「米欧回覧実記」(二)(岩波文庫) 66頁。
(37) 同上68頁。
(38) 勝田孫弥「甲東逸話」110頁。
(39) 「木戸孝允文書」四401—402頁。
(40) 「大久保利通文書」第四483—486頁。
(41) 前掲「米欧回覧実記」(四)(岩波文庫) 106頁。
(42) 「木戸孝允文書」四369頁。
(43) 「大久保利通文書」第四484頁。
(44) 「木戸孝允文書」五12頁。
(45) 前掲「米欧回覧実記」(三)(岩波文庫) 298頁。
(46) 大久保から大山への1872年11月20日付書簡の一節,(「大久保利通文書」第四468頁)。
(47) 前掲「米欧回覧実記」(一)(岩波文庫) 10頁。
(48) 同上(三) 298頁。
(49) 同上285頁。
(50) 同上301頁。
(51) 同上352頁。
(52) 同上(四) 389頁。
(53) 同上320頁。
(54) 同上(三) 293頁。
(55) 同上296頁。
(56) 同上282頁。
(57) 同上297頁。
(58) 同上(三) 329—330頁。
(59) 同上330頁。
(60) 同上340頁。
(61) 同上340頁。
(62) 同上342頁。
(63) 「木戸孝允文書」五15—16頁参照。
(64) 「大久保利通文書」第四492頁,「大久保利通伝」下巻54頁。
(65) 同上501頁。
(66) 三宅雪嶺「同時代史」第一巻340頁。
(67) 勝田孫弥「甲東逸話」111—112頁。
(68) 前掲「米欧回覧実記」(一) 396—398頁参照。

(69) 木戸から1873年1月28日付井上宛書簡（「木戸孝允文書」五4—5頁）。
(70) 佐々木高行「明治聖上と臣高行」205頁。
(71) 同上82頁。
(72) 「大隈伯昔日譚」528—529頁。
(73) 勝田孫弥「甲東逸話」129頁。
(74) 同上239頁，「大久保利通伝」下巻805—806頁。